
ソードアート・オンライン 黄昏の剣士

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアート・オンライン 黄昏の剣士

【Nコード】

N7625Z

【作者名】

暁

【あらすじ】

アルヴヘイムに黄昏時に現れる、謎の剣士の噂が流れていた。そしてキリトはその謎の剣士と出会い、また面倒事に巻き込まれる。

プロローグ(前書き)

プロローグです。キリト達はまだ登場しません。

プロローグ

夕暮れ時、アルヴヘイムの薄暗い森の中、男が森の中を走ってた。いや、走っているより駆けているという表現のほうが合っているだろう。それほど速さで彼は森の中を移動していた。

「ハア、ハア……。やっと撒いたか……!?」

そう呟いた瞬間、目の前の風景が揺らいぎ人が現れた。おそらく幻影魔法を使って風景と同化していたのだろう。現れたのは全身をマントで覆い、顔は仮面で隠している謎の男、いやもしかしたら女かもしれない。

「……テメエが何者なんだ。決闘が終わった頃から付けて来やがって。俺はただ決闘で勝っただけだろう。追いかけられる理由がわからないだけか？」

「……それだけだったら私もここまで追って来ないさ。貴様……アルスが決闘で《違法OSS》いほうオリジナルソドスキルさえ使わなきゃな」

仮面を着けた人影は、仮面を着けているからか声から性別を判断できそうにない。

アルスとよばれた男が《違法OSS》という言葉聞いた瞬間、態度が変わった。

「テメエ……どこからそれを……!!ま、まさかテメエがチーターマスク・ザ・リッパー(違法者)キラーの《切り裂き仮面》か!？」

「確かに掲示板ではその名で通っているみたいだな。他にも黄昏時に現れるから《黄昏の亡霊》トワイライト・ゴーストとか呼ばれてるよ。まあ、手軽にゴースト、できればリッパーとでも呼んでくれ」

リッパーは男の発言を肯定し、自分が《切り裂き仮面》であることを認めた。

「ってことは、テメエを倒せば俺の名声上がるってことか」
そう言っただけアルスは背中から剣を抜く。

「……いくぞ!!」

アルスは一気に距離を詰め、切り裂き仮面に斬りかかった。

それに反応してリッパーも腰から剣を抜き、アルスの一撃を防いだ。「今の一撃を防ぐか。なるほど、なかなかの強さは持っているようだな。だが、これはどうかな!？」

アルスは半歩さがると次は、怒涛の連撃を繰り出した。しかし、リッパーは全て受け流し、身体に傷どころか、マントに傷一つなかった。

リッパーは受け流し終わると、左手に隠し持っていたナイフでアルスに斬りかかる。

「へっ! 甘い!！」

アルスは突きの連撃で水平に構えていた剣を手首だけで動かし、ナイフを弾き飛ばした。

ナイフが空中を舞うなか、二人は距離を取った。

「これまでやるとは。ククク……倒しがいがある奴だ」

「……一つ答える。何故これほどの実力がありながら《違法OSS》を使う」

これまで戦いの中沈黙を続けていたリッパーが自身が感じていた疑問を聞いた。

「決まってるんだろ、今より強くなるためさ。強くなればもつと俺の名が有名になる。しかし、テメエのその剣見たことないな、いったいどこで手に入れた？」

ベテランプレイヤーのアルスでさえ、リッパーの剣は見たことがなかった。

形は日本刀のようだが、鍔はなく元々鍔がある部分は少し丸い膨らみがあり、柄には飾り紐があしらわれており、その刀身は闇のような黒色だ。

「コイツは特別製だね。多分この世界でも持っているのは私だけだ」なるほど。ならテメエを倒してその剣をいたたくでしょう!！」

するとアルスは剣を両手で持ちその場からリッパーに突っ込みながら自身を回転させて、遠心力も加えたその一撃をリッパーの横っ

腹に鋭い一線を繰り出す。

そして繰り出された一線には緑色のエフェクトが煌いていた。

(ソードスキルか!?)

リッパ―はエフェクトが煌めくのを確認してソードスキル認識し、すぐさま回避行動に移る。

「遅い!!!」

ザシユ!!!

想像していたよりも速かったが咄嗟とつぱに左腕で防ぐ。

「……っ!?!」

ズパンツ!!!

リッパ―は、防いだ反対方向の右側から斬撃を受けた。しかしその斬撃は、今左腕に食い込んでいる剣からでも、攻撃魔法の一撃。そもそもアルスは詠唱していない。でもなかった。

リッパ―は左腕を庇いながら、後ろに跳び距離を取り静かに呟ういた。

「……一度決闘で見ていたとはいえ実際にやられると見切るの難しいな。それが貴様の《違法OSS》か」

「そうだ。これが俺の違法OSS……《ツイン・ストライク》!!!」
アルスはリッパ―に会心の一撃を与えたそのスキルの名を告げた。
「なるほど……ではそのスキル、壊させてもらう!!!」

ガシャン!!!

「なっ……!!!」

音が鳴ると同時にリッパ―の剣が『へ』の字に曲がる。

そしてリッパ―は、曲がった刀身をアルスに向けて。

バァン!!!バァン!!!バァン

撃った。

「け、拳銃……だと……」

アルスはHPは0にならなかったものの、相当なダメージを受けた。

「な、なんで銃がこの世界にあるんだよ!!!いや、それよりもなん

で剣が銃に!？」

「そんなこと、どうでもいいだろう。さあ、終わりだ」

「クツ! 《ツイン・ストライク》」

アルスは銃の存在に混乱しながらも、リップパーを倒すべくソードスキルを使う動作するが。

「!?!。は、発動しない。どうして!?!」

「悪いね。違法OSSは《壊させてもらった》」

リップパーはすでにアルスとの距離を詰めて首の横に刃を当てていた。

「……一つ聞かせろ。テメエは何者だ」

「私? 私はただの プレイヤーだよ」

ズパン!!

言い終わると同時にリップパーはアルスに止めをさした。

「ふう、美味しい」

リップパーはアルスを倒した後、央都アルンの宿屋でホットドッグを食べていた。今のリップパーは仮面とマスクを着けていないで、普通の装備のためここにおいても違和感はない。

「ふあゝあ。なんか眠くなってきたな。……もうそろそろ落ち(口グアウト)よう」

ホットドッグと一緒に買ったコーヒーを飲み干し、ログアウトするためウィンドウを開く。

「さん。この世界にあなたがいるんですね。必ず……会に行きます」

リップパーは自分の決意を確かめて黄昏に浮かぶ浮遊城アインクラッドを眺めながら、アルヴヘイム・オンラインから姿を消した。

プロローグ（後書き）

ソードスキル紹介。

《ツイン・ストライク》

違法OSS。

回転しながら突っ込み遠心力を加えた一撃を与えると同時に不可視の一撃を与える。

1 (前書き)

今回からキリト達が活躍します。

「キリト。私はあんたがとても許せない……。なぜだかわかる？」
日が沈みかけてきた午後五時頃。シノンにはネコ耳をピンツと立てながらそう言うと、目の前で正座している俺に静かに語りかけた。

「……本当に、すまなかった」

他のみんなも口を開けず、ここは一切の音がない無音の世界となっていた。その静けさは仄暗い海ほのくらの底のようだ。

「あ、あのシノンさん！これは私にも責任でお兄ちゃんは……」

俺の妹であるリーファが沈黙を破り俺のことを庇おうとする。けど。

「リーファ良いんだ！！これは……俺の責任だ……」

そう、これは俺の責任でリーファは何も悪くない。

「キリトくん……」

「パパ……」

「キリ公……」

「キリト……」

「キリトさん……」

アスナ、ユイ、クライン、リスベッド、シリカが心配そうに俺とシノン、リーファを見守っていた。

「……じゃあ聞かせてもらおうわ。どうして……」

シノンは言葉を区切り、怒りを押さえながら大きな声で俺に言った。

「どうして待ち合わせ時間に二時間も遅れるのよ！！」

そう、俺とリーファはシノンが指定した待ち合わせ時間に二時間遅れて来ていた。つまり大遅刻してしまった。

なぜ大遅刻しているのかというと、それは

約三時間前にさかのぼる。

ピッ!!

「はい、もしもし」

ある日の午後二時頃、携帯電話が着信音を鳴らしていたので、電話にでたときのありきたりなセリフを言いながら、電話にでた。

『キリト？今日暇？暇だったら手伝ってほしいことがあるんだけど』
電話の相手はシノンだった。

「ああ、今日は暇だ。それで手伝ってほしいことって？」

シノンとは、《GGO》^{カンゲイル・オンライン}で知り合ってから時々連絡を取り合っている。俺も《エクスカリバー》を取りに行く時、シノンに手伝ってほしいと連絡したことがある。

『まあ、詳しいことは会ってから話すわ。午後三時にリズベットの工房に集合ね』

「わかった」

『あつ！それと直葉ちゃんにも伝えてくれない？あんと同じ家だから伝えるのは簡単でしょ』

「ああ、スグには俺から伝えておく」

『じゃあお願いね』

プツン

電話切れたのを確認して、道場で剣道の練習をしている直葉のもとに向かう。

「ふっ、ふっ」

道場に入ると直葉が素振りをしていた。よほど集中しているのか俺が入って来たことに気付いていない。

邪魔にならないように道場の隅っこで素振りが終わるのを待つ。

「ふっ……」

素振りを終えて直葉は隅っこで見ていた俺に気付いたようだ。

「スグ。お疲れ様」

直葉に近づき持っていたタオルとスポーツドリンクを渡す。

「ありがとうお兄ちゃん。居たなら声かけてくれればいいのに」

「邪魔しちゃ悪いと思って」

直葉はにこやかに笑うとスポーツドリンクを飲み、タオルで汗を拭う。

「ところでお兄ちゃんはどうして道場（みちば）に来たの？」

「シノンに手伝ってほしいことがあるって言われてな。それを伝えるに……って言っても詳しいことはリスベッドの工房で聞くことになってる。午後三時に集合だって」

「わかった。じゃあまだ時間に余裕があるね。私、お風呂に入ってくるけど私のこと待っててね」

「おう。一人で行ってもつままないからな」

直葉が風呂に入る支度を始めたので俺は自分の部屋に戻ることにした。

直葉が風呂に入っている間、一人でアルヴ Heim にダイブする訳にもいかないの俺は昼寝をすることにした。

これが遅刻の原因になるとは知らずに。

「お兄ちゃん？」

私がお風呂から上がって着替えたあと、お兄ちゃんとアルヴ Heim にダイブするためお兄ちゃんの部屋に来ていた。

「スウ……スウ……」

部屋に入るとお兄ちゃんはベッドの上でお昼寝をしているようだった。

（まだ時間に余裕あるかな）

お兄ちゃんを起こさないように言葉を口の中で紡ぎながら、私は時計を見た。時計は約束の時間までまだ余裕があった。

（起こしたら悪いよね）

静かに部屋のドアを閉めながら、机の上の本を手を取った。

(う〜ん、私にはよくわからないかな)

難しいことが書かれた本を机の上に戻し、お兄ちゃんに近づく。

(そういえば、前にお兄ちゃんと一緒に寝たな……)

あれはお兄ちゃんが《ソートアウト・オンラインSAO》というデスゲームから帰還して恋人のアスナさんが未だに帰還してなく、落ち込んでいたお兄ちゃんを励ましたあと、つい一緒に寝てしまったことがあった。

(……す、少しだけなら……いいよね?)

私は悪いと思いつながらお兄ちゃんの横に寝るところがあった。

(う、う〜。やっぱり恥ずかしい)

そう思いながらもお兄ちゃんの寝顔を見て安心している自分があった。

(やっぱり、お兄ちゃん……と一緒にいると……安……し……。スウ……スウ……)

今、俺は昼寝から起きて驚いたことが二つある。

一つ。起きたら隣で直葉が寝ていた 何か前にも似たようなことがあったような ことである。

二つ。シノンとの待ち合わせ時間がとくに過ぎていたことだ。

「って冷静に状況判断してる場合じゃない!おい、スグ!!起きろ」
起こすため肩を揺する。

「あつ、お兄ちゃん」

直葉はまだ寝ぼけているのか俺にいきなり抱きついてきた。抱きついてすぐ目が覚めたのか顔を真っ赤にしながら俺から離れた。

「お、お兄ちゃん!?あつえつと、これは」

直葉は真っ赤な顔のままパニックっていた。表情がコロコロ変わって面白いな。ってこんなこと考えている場合じゃないんだよ!

「スグ、急いでダイブするぞ!!遅刻だ!!」

遅刻という言葉に反応して時計を見た直葉はすぐ状況を把握したようだ。

「だ、大遅刻だよ」

「ああ、急ぐぞー!」

俺と直葉は急いでダイブして、リズベッドの工房に向かった。

と、こんなことがあり俺はシノンの前で正座しているのであった。

「本当にごめん、シノン」

もう何回目になるかわからない謝罪を言い頭を下げた。

「ハア……。もう、いいわよ。何かいつものアンタらしくなくて気持ち悪いし」

「……俺だつて悪いと思つたらしつかり謝るさ。それよりも俺達を呼んだ理由聞かせてくれよ」

気持ち悪いと言われたのでいつもの調子で返す。

俺とリーファと同じくシノンに呼ばれたのか、アスナ、ユイ

いつもは俺といるのだが今日はたまたまアスナのところに行った、
クライン、シリカ、そしてこの工房の店主ことリズベッドがいた。

「そうね。みんな、これを見て」

そう言つてシノンはテーブルの上に新聞を書くプレイヤーが定期的に配る新聞を広げた。

「ん、なんだあこりゃ？つてなあにい!!恋人募集中だど!？」

クラインが隅っこに小さく書かれた恋人募集中の広告に目がいった。

「どこ見てるのよ。ここよ、ここ」

クラインが見当違いのところを見ていたのでシノンが新聞の一面に指を指した。

そこには『《黄昏の亡霊》またチーターを退治これで15人目。

決闘でも無敗……謎の剣士、その正体は!？」と書かれた文章と仮

面を着けてマントを纏^{まと}う剣士の写真があった。

「へえ、決闘で無敗なんて凄いな」

「お兄ちゃん知らなかったの？今とっても有名だよ。アスナさんは知ってましたか？」

「うん。今日ユイちゃんと色々調べごとしている途中で見つけてね。強い人でチーター以外の人は普通に接して決闘もしてるみたいから、キリトくんに今日教えてあげようかなって思ってたの。ね、ユイちゃん」

「はい、ママ」

むう、人を戦闘みたいに……まあ、確かに聞いてみたら戦ってみたくなったが。

「私も知ってます。黄昏時に現れて、決闘しても対戦相手名に《unknow》アンノウン 《正体不明》トワイライト・ゴースト って呼ばれているんですよ。みんな長いからゴーストって呼んでるらしいですけど。ね、ピノ」

どうやらシリカも知っていたみたいで、肩に乗っていたピノにゴハンを与えながらゴーストについて話した。

「俺も知ってぜ。チーターからは嫌味を込めて《切り裂き仮面》マスク・ザ・リッパー って呼んでるようだな。あと、何か見たこともない剣を使っているみたいで、ドロップアイテムじゃないらしくてキャラクターメイクの剣だってもっぱらの噂だぜ」

「……そんな噂があったから、最近依頼が多かったのね。けど見たこともない剣か、興味あるわ」

俺とリズベッドは知らなかったが、他のみんなは知っていたらしい。

「それで、今日呼んだのとそいつが何の関係があるんだ？」

「その下の文章と写真を見て」

文章と写真を見ると、『一体何者なのか』や『実際戦ってみてどうでしたか？』など謎の剣士についての憶測や戦って負けたやつのご感想、果てやPKされたチーターのご感想まで書かれていた。そこで

俺とみんなは書かれていたことに驚いた。

「銃だと！何でこの世界に！？」

アルヴヘイムにある遠距離攻撃は大まかに分けると二種類あり、俺はあまり使わないが魔法攻撃と、シノンが使っている弓である。

「私も初めて見た時は嘘だと思っただわ。でもその写真を見てそれが真実ってことが証明されたわ」

写真には剣に良く似た銃をチーターに撃っているゴーストの姿だった。

「これを見て銃があるんだって思ったらこの目で見てみたくなって、けどチーターにしか銃を使っけて普通のプレイヤーには使っけてないみたいだし、どうやって銃を見せてもらえるか解わかなくて……だからお願い！私に力を貸して！！」

そう言っけてシノンは俺達に頭を下げた。シノンの気持ちは俺も銃ゲーの《GGG》で光剣を見つけて時は死ぬほど嬉しかった。

「わかった、俺は協力する。みんなは？」

みんなの顔を見渡したが、みんな協力する気満々のようだ。

「み、みんな……ありがとう」

シノンは少し照れくさいのか顔を背そむけていた。

「まあ、今ちようど黄昏時だしとりあえずゴーストに会っけてみようぜ。ユイ、今ゴーストがいるか分かるか？」

「ちよつと待っけてください。……パパ、どうやらゴーストは今シルフ領にいるみたいですよ！！」

「よし、みんないくぞ」

「……おぉー！！！！」

俺達はゴーストに会っけたため、シルフ領に向かった。

1 (後書き)

次回、ついにキリトとゴーストが出会う……かも知れない？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7625z/>

ソードアート・オンライン 黄昏の剣士

2012年1月2日01時49分発行